

学校建築をコンバージョンしたアートセンターの展示空間に関する研究 「3331 Arts Chiyoda」を事例として

A STUDY ON THE EXHIBITION SPACES OF A CONVERTED ART CENTER A Case Study on 3331 Arts Chiyoda

9042 原友里恵

指導教員 教授 本杉省三
助教 佐藤慎也

1. はじめに

1-1. 研究の背景

環境問題や建築費用の面から、コンバージョンは建築の長寿命化をはかるだけでなく、新たな利用価値を生み出す重要な手段として位置づけられている。国内のコンバージョンに関しては、改修後の用途が美術展示施設になるものが最も多い。その理由は、アーティストの作品発表の場が十分ではないこと、以前にも増して芸術文化に人々の目が向けられていること、改修工事が比較的楽なこと等が挙げられる。そのような施設の中に、近年「アートセンター」と呼ばれるオルタナティブスペースが見られるようになった。それはアートに関する幅広い活動を行うものであり、展示空間は柔軟性を持ったものが多く、従来の展示室では行われてこなかった新たな活動が数多く行われている。

また、少子高齢化に伴い、小中学校で余裕教室や空校舎が発生していることから、学校建築から文化施設へのコンバージョン事例が増加している。学校は地域住民にとって身近な公共施設であり、地域のシンボリック的存在であることも多く、廃校となった後も可能な限り活かしていくことが重要であると考えられる。

1-2. 研究の目的

本研究では、学校建築からコンバージョンされたアートセンターの展示空間について、改修設計・施工の経緯から、その後の運営、空間活用までを把握する。それによって、今後を着実に増えていくと考えられる、学校建築から美術展示施設へのコンバージョン設計の1つの指針を見出すことを目的とする。

2. 研究概要

2-1. 研究方法

- (1) コンバージョンされた美術展示施設、アートセンター、学校建築のコンバージョン事例の傾向を探るため、文献により調査を行う。
- (2) アートセンターの事例において、展示空間の改修がどのように行われたのか、図面や設計者へのヒアリングにより調査を行う。
- (3) 展示空間の使用状況を把握するため、行われた企画の概要を、文献により調査する。
- (4) 展示空間の設計が美術展示へ及ぼす影響を把握するため、いくつかの現代美術の展覧会について、展示構成を実測により調査し、分析を行う。

2-2. 研究対象

対象施設は「3331 Arts Chiyoda」とする(表1)。この施設は、廃校となった中学校をコンバージョンした現代美術を軸とするアートセンターである。学校建築をコンバージョンした美術展示施設としては、大規模改修が行われた最新の事例であり、展示空間では様々な活動が展開されている。

(2)の調査は展示空間(コミュニティースペース、ラウンジ、ホール、ギャラリー)を、(3)の調査は2010年度に行われた企画を、(4)の調査は2010年度にホール、ギャラリーで行われた3331 Arts Chiyoda主催の現代美術に関する展覧会を調査対象とする。

表1 3331 Arts Chiyoda 施設概要

施設名	3331 Arts Chiyoda	事業目的
所在地	東京都千代田区外神田	
改修後用途	その他(アートスクエア)	アーティストという総合的な創造的プロセスを持つ活動性を地域力、文化力を形成するインセンティブな存在として最大限に活用し芸術文化活動を支援する
改修前用途	中学校	
改修設計者	佐藤慎也+メジロスタジオ	
用途地域	商業地域	
延床面積	7,239.91 m ²	事業内容
規模	地下1階、地上4階	展覧会等を主とした発表活動、国内外や異世代等の交流活動、アーティストやキュレーター等の育成活動、ワークショップ等を通じた教育普及活動、地域とアーティストを結ぶ広報活動等
構造	鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造	
竣工年	2010年(改修前:1978年)	
運営主体	合同会社 コマンドA	
主な機能	ギャラリー、オフィス、カフェ、多目的スペース、屋上菜園等	

3. 事例研究

3-1. コンバージョンされた美術展示施設

多くの事例が最小限の改修にとどめられ、既存建物の雰囲気等を最大限に活かした展示空間とする傾向にある。そのため、既存空間に適合した作品選びと展示方法により、空間と作品を同時に鑑賞させている。そのような展示空間の魅力は、建物の旧用途の面影と積み重ねてきた歴史、そこに作品が展示されることで発生する空間と作品の融合である。

3-2. アートセンター

「アートセンター」とは、美術館でもギャラリーでもない、アートに関する様々な活動を行うオルタナティブスペース¹である。運営主体や目的、事業内容、施設形態は様々であり、近年アーティストイニシアティブ²による施設も増えている。活動で多くみられるのは、展覧会や滞在制作、ワークショップ等であり、ほとんどの施設が現代美術を対象としている。

3-3. 学校建築のコンバージョン

近年、廃校となった学校を演劇の稽古場やインキュベーション施設等に再活用する事例が多くみられる。ほとんどの学校建築は設計が標準化されており、天井高、開口面積、柱のスパン等がほぼ一定であり、空間に余裕がある一方で、耐力壁が平面計画上の大きな制約となったり、温熱環境等の設備面が整っていない場合が多い。

4. 展示空間のコンバージョン設計

4-1. 平面計画

展示空間全体には自由に行き来できるような連続性をもたせることが求められた。隣接する公園に対して開いたコミュニティスペースを確保するため、耐力壁の一部をギャラリー側に移動している(図1)。一方、ギャラリーに関しては展示に適したスペースとするために、「壁面長の確保」と「コーナー(入隅)をつくる」ことが求められ、壁に囲われた閉じた展示空間がつけられた。そのため、ギャラリーに面する全ての開口部が塞がれている。

4-2. 仕上げ

スペースによって仕上げに関する改修方法を変えている(表2)。ギャラリー部分に関してはニュートラルさが求められ、白を基調とした仕上げが選ばれている。目地のない艶のある床、凹凸のないフラットな壁、既存RC躯体・配線等が塗装された天井によって構成されている。

4-3. 展示壁

ホールとギャラリーには展示に適したニュートラルな壁面が求められ、柱、梁を覆い隠した2重壁とし、その隙間を人が移動できるように計画されている。それによりギャラリーの床面積は減少しているが、柱型や梁型、コンセント等が現れないフラットな展示壁面をつくり出すとともに、壁の裏を映像機器等が設置できる技術スペースとして利用している(図1)。また、釘等を用いて重量のある作品を展示できるように、標準的な現代美術館と同様な下地とする一方で、より平滑な壁面を確保するために、表面の仕上げにはガラスクロス等は使用していない(表2)。

4-4. 照明・設備

スペースによって、既存の蛍光灯や電気系統の利用、部分的に追加、全てを一新というように改修方法を変えている。それとともに、スポットライトを設置するレールを展示空間全体に配置している(表2)。また、梁の影が壁面に現れてしまうことを避けて照明を低い位置に設置すると、展示空間に圧迫感が出てしまうため、可能な限り高い位置に設置した。蛍光灯と梁の位置との関係から壁面に均質な光が得られなかった

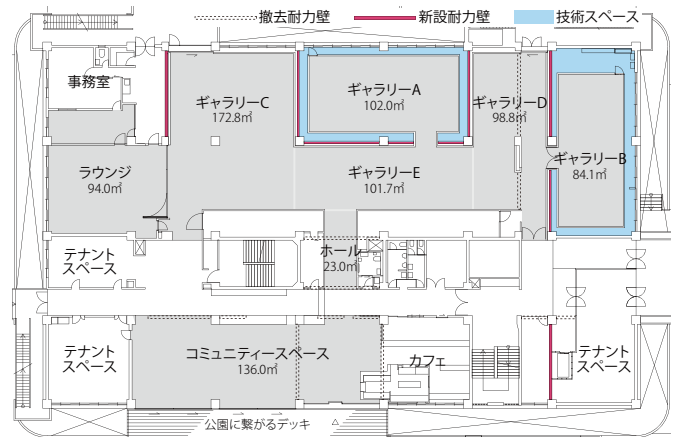


図1 平面計画

表2 仕上げと照明設備

スペース名	仕上げ/照明設備
コミュニティスペース ロビー、交流の場、展示に利用	床 既存フローリングブロック、一部モルタル補修 壁 既存 RC 躯体 + AEP 塗装 天井 既存 RC 躯体 照明 既存蛍光灯 + レール
ラウンジ ラウンジ、アーカイブ、展示に利用	床 エポキシ樹脂系硬化セルフレベルング (白艶) 壁 既存タイル + AEP 塗装 天井 AEP 塗装 照明 新規蛍光灯 + レール
ホール ギャラリーの出入口、展示に利用	床 エポキシ樹脂系硬化セルフレベルング (白艶) 壁 合板 t=12×2 + PB t=9.5×2 + バテ処理 + AEP 塗装 天井 PB t=9.5 + AEP 塗装 照明 新規ダウンライト
ギャラリー A 展示スペース	床 エポキシ樹脂系硬化セルフレベルング (白艶) 壁 合板 t=12×2 + PB t=9.5×2 + バテ処理 + AEP 塗装 天井 AEP 塗装 照明 新規蛍光灯 + レール
ギャラリー B 展示スペース	床 既存フローリングブロック、一部補修 壁 合板 t=12×2 + PB t=9.5×2 + バテ処理 + AEP 塗装 天井 AEP 塗装 照明 新規蛍光灯 + レール
ギャラリー C, D, E 作品制作活動、WS、展示に利用	床 エポキシ樹脂系硬化セルフレベルング (白艶) 壁 合板 t=12×2 + PB t=9.5×2 + バテ処理 + AEP 塗装 天井 AEP 塗装 照明 既存蛍光灯 + 新規蛍光灯 + レール

箇所には、新規の蛍光灯が設置されている。空調設備機器については、均質な光を確保することを優先した配置計画が行われている。

4-5. 考察

連続性のある開いた空間と閉じた空間がつけられており、スペースによって改修度合を変える手法をとっている。それにより、1つの企画で使用する空間の範囲に自由度が出たり、様々な活動に対応することが可能となっている。このような展示空間は、アートセンターの活動の幅を広げる1つの要因となりうる。

ギャラリーは、床、壁、天井の仕上げと蛍光灯の光により均質な空間がつけられている。特にギャラリーA、Bは展示専用のスペースとするために閉じた空間がつけられ、全ての壁の裏に技術スペースを確保し、照明もより明るいものに一新されている。

壁の位置や室機能の変化は、照明の配置、明るさに大きく影響することがわかった。また、学校建築の天井高や構造上の制約、柱のスパンにより、一般的な展示空間に求められる大空間の確保は困難である。し

かし、ギャラリーではラーメン構造を活かし、既存の柱・梁の位置に壁を新設し、展示に有効なフラットな壁面確保ができる位置に仕上げ面を決めているため、床面積は減少しているが、展示壁は高性能になる。

5. 展示空間の使用

5-1. 展示空間使用状況

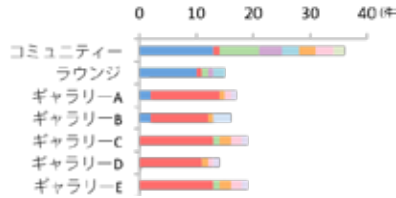
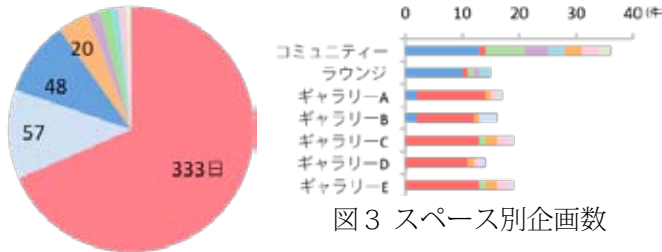


図3 スペース別企画数

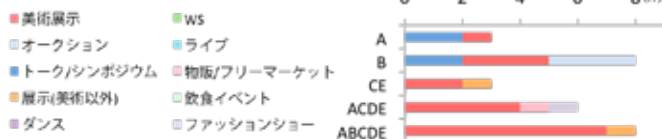


図2 内容別使用日数 図4 使用ギャラリー別企画数

企画内容別に展示空間の使用日数をみる(図2)。展示空間では様々な企画が行われており、特に美術展示の使用頻度が高い。空間の連続性を活かした展示空間全体を使った企画はみられず、スペースごとに行われた企画の内容をみると(図3)、トーク/シンポジウムはコミュニティスペースやラウンジ、美術展示はギャラリーで行われる傾向にある。また、コミュニティスペースは最も多様な使われ方をしており、特に一時的に多くの人が集う賑わいのある企画が多い。ラウンジは音楽やダンス等の公演に使用されている。ギャラリーでも様々な企画が行われているが、圧倒的に美術展示に比重が置かれており、企画数をみても展示替えが頻繁に行われていることがわかる。そこで、ギャラリーを使用した各企画について、ギャラリーのどのスペースを使用していたかをみる(図4)。美術展示は、ギャラリー全て、またはギャラリーB以外全てを使用している企画が多く、空間をより広く使用していることがわかる。ギャラリーの延長としてコミュニティスペースやデッキ、外壁面等もサイズの大きな作品の展示に使われることがあった。ギャラリーBは単独でも美術展示以外に使われることが多い。

5-2. 考察

展示空間では様々な企画が行われており、その中でも、美術展示に最も比重がおかれていることがわかった。また、スペースによって行われる企画の内容に特徴があることがわかった。

コミュニティスペースは、普段はカフェの客席や打合わせスペースであり、別用途で長期的に使うことに適さないが、施設の「顔」となる広い空間であるために、様々な企画が行われ、特に一時的に賑わいのあ

る企画に使われている。ラウンジも普段はアーカイブスペースとして使われていることや、コミュニティスペースから独立した動線が確保できることから、一時的に人が集う企画が多いと考えられる。ギャラリーは、仕上げが整った統一感のある空間が確保されているため、展覧会等の美術展示に最も適しているといえる。また、ギャラリーC、Eは広く開いた空間であるため、ワークショップにも使われている。ギャラリーBは、床の仕上げの違いから他のギャラリーと雰囲気が異なること、仮設壁により専用の出入口を確保できること等から、他のギャラリーから独立させやすいため、単独で使われることが多いと考えられる。

6. ギャラリーでの美術展示

6-1. 展示エリア分けと仮設壁

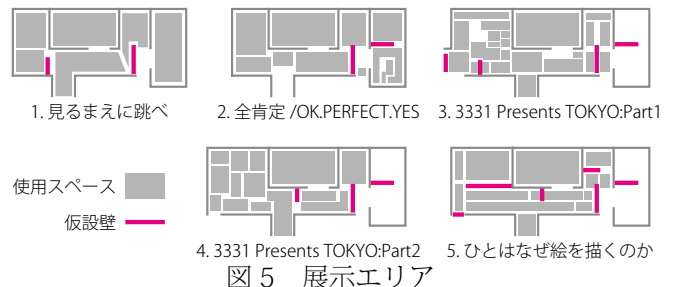
それぞれの展覧会(表3)で、作品のテーマやアーティストによって展示エリアが分けられている(図5)。閉じたスペースではエリアを大きく使用し、広く開いたスペースではエリアを細かく分割する傾向にあることがわかる。また、ギャラリーA、B、D等の閉じたスペースには、文字や映像を扱う作品が展示されることが多く、同時に椅子・ベンチが設置されている。ホールは空間演出作品が展示されることが多い。

仮設壁は各展覧会で必ず設置されており、それぞれ既存の壁や梁に沿って配置されている。ギャラリーEには、ほとんどの展覧会で細長い空間を仕切るような位置に設置されている。また、ほぼ常設的に使用されている仮設壁もある。

表3 調査対象展覧会

No.	展覧会名	会期
1	開館記念展 第1弾「見るまえに跳べ」	3/14 - 4/11*
2	開館記念展 第2弾 佐々木耕成展「全肯定/OK.PERFECT.YES.」	4/24 - 5/23*
3	グランドオープン記念展 3331 Presents TOKYO:Part1	6/26 - 7/25
4	グランドオープン記念展 3331 Presents TOKYO:Part2	8/7 - 8/29
5	日比野克彦 個展「ひとはなぜ絵を描くのか」	10/30 - 12/13

*グランドオープン前は改修工を終了前のためギャラリーCの大きさが小さい。



6-2. 平面型作品の壁面展示中心高さ

平面型作品の壁面展示中心高さの平均値は1,469mmであり、ほぼ目線の高さである。展覧会ごとにみると(図6)、作品数が多い3、4、5の展覧会は壁面を高さ方向にも広く使っていることがわかる。展示室ごとにみると(図7)、天井高の低いホールと、閉じた空間であ

るギャラリー A、B が低い値となる。また、直行する梁が存在する壁面では、梁を避け、梁下よりも高い位置に作品を展示することが多くみられた。

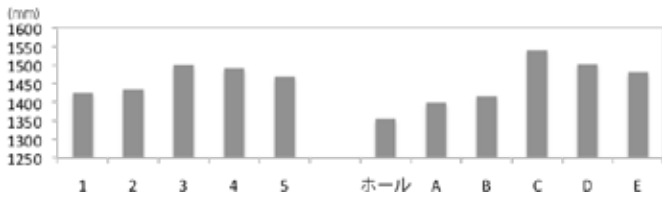


図6 展覧会別中心高さ 図7 スペース別中心高さ

6-3. 照明

ギャラリー C、E は常に蛍光灯を使用している。ギャラリー D はスポットライトのみを使用した展示が比較的多く、照明による演出を行う作品が多く展示されていることがわかる。また、蛍光灯を使用する場合もスポットライトは必ず使用されている(表4)。

表4 スポットライト数(台)

展覧会 No. スペース	1	2	3	4	5
ホール	DL			DL	DL
ギャラリー A	11				
ギャラリー B		4			
ギャラリー C		31			16
ギャラリー D	23	6	19	15	1
ギャラリー E	27	19	18		13

DL ダウンライト(ホールに常設)
 蛍光灯使用
 スペース不使用

6-4. 考察

空間が開いているか閉じているかという違いや、展示室の形状によって、エリア分けや展示される作品の種類、壁面展示の中心高さに傾向が出ることがわかった。広く開いた空間では、多くの作品が展示されるため、仮設壁を設置したり、エリアを細かく分けて展示している。また、他の空間と切り離しにくいと、空間を暗くする必要のある作品や空間演出作品は展示されない。一方、閉じた空間では、他の空間と切り離すことや暗くすることが容易なため、仮設壁でエリア分けを行わず、全体を使って同じテーマや作家の作品をまとめて展示したり、空間演出を行っている。また、時間を掛けた作品鑑賞を可能とする椅子・ベンチの設置により鑑賞者の目線が低くなることから、壁面展示の中心高さが低くなっていると考えられる。ギャラリー B に仮設壁が設置されることが多いのは、ギャラリー A に比べて細長い空間であるためと考えられる。ホールは狭いため、距離をとって鑑賞するような作品の展示には向かず、また、展覧会の「顔」となること、人が通る空間であることから、空間演出作品の展示が多いと考えられる。よって、美術展示においては、仮設壁を設置する必要がなく、様々な作品を展示できることから、コーナーを持つ壁に囲まれた閉じた空間が適しているといえる。

低い天井高やラーメン構造は、展示空間に求められる大空間の確保は難しいが、仮設壁の施工や配置が容易であり、展示替えの多い施設には適していると考えられる。また、梁に沿って設置された仮設壁は梁型が出るため、梁下より高い位置が使えなくなることは把

握しておくべき点であり、梁型が片方の面には出ないように設置することが有効である。また、常設的に設置されているものに関しては、壁面長を増やすだけでなく、他のスペースと空間を仕切り、鑑賞者の動線を一筆書きとする役割も果たしている。

照明に関して、ギャラリー D は蛍光灯使用時でも十分な明るさと均質な光が得られていないといえる。また、常に使用されているギャラリー D の仮設壁は、設置前と比較すると壁面長はあまり変わらないが、コーナーがつくられるため展示しやすくなっている。しかし、電気系統はギャラリー D と E で分かれており、この壁面はギャラリー E の延長で使われることが多いと、照明設備面では展示の計画が困難である。

7. 結論

様々な活動が行われることが予想されるアートセンターでは、空間に連続性を持たせることによって使用する空間の範囲に自由度を出すことよりも、スペースの質の違いを出すことが効果的であるといえる。よって設計時には、使用目的にあわせて仕上げを変えたり、スペースの開閉を明確にすることが有効である。

ギャラリーについては、学校建築は大空間の確保が困難なため、より多くの作品展示に対応させるには壁面の質を高めることを重視するべきである。ラーメン構造を活かした 2 重壁によってニュートラルさを確保し、仕上げは重量のある作品にも耐える仕様とする。また、美術展示にはコーナー、閉じた空間、細長過ぎない空間が展示計画のしやすさに繋がる。学校建築は外部に空間的な余裕をもっているものが多く、内部に展示できないサイズの作品の展示は外部に展示することが可能である。

照明設備については、既存の蛍光灯や電気系統の利用によって均質な光が得られなかったり、電気系統の不便さが出てきたりと、空間を使用し始めてからみえる問題が多く、照明設備は慎重な計画が必要である。

学校建築から美術展示施設へのコンバージョンによって展示空間をつくり出す上で、大空間の確保等の解決困難な問題もあるが、建物の特徴を最大限に活かし、展示空間に必要な要素を整えていくことで、様々な企画や作品展示が可能な展示空間をつくることのできる。

【注】

- 1 美術館や画廊とは異なるアートに関する多目的空間。
- 2 アーティスト主導で施設運営を行うこと。

【参考文献】

- 1) 仙田満・篠直人・矢田努・鈴木裕美：美術館展示室の建築計画的な研究 展示壁面の配置方法と利用者の評価について、日本建築学会計画系論文集, 第 517 号, 1999.3
- 2) 近江祐史・角田誠：学校建築のコンバージョン設計における既存空間特性と空間変容の因果関係, 日本建築学会大会学術講演梗概集(九州), 2007, 8